様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２５２０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４３６６

研究課題名（和文）離乳食場面に見られる父親・母親の行動特性と子どものアタッチメント安定性との関連

研究課題名（英文）Relationship between fathers' and mothers' behavior when feeding their infants and their children's subsequent attachment security.

研究代表者
福田　佳織（Fukuda, Kaori）

東洋学園大学・人間科学部・教授

研究者番号：１０４３３６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の主な目的は、乳児期の父親・母親の行動特性をミクロな視点から分析することにより、幼児期のアタッチメント安定性の個人差に影響を及ぼす要因を明らかにすることであった。結果として、乳児のネガティブな情動表出、特に強度のネガティブな情動表出への親の対応が、後の（幼児期の）父親・母親へのアタッチメント安定性に関与する可能性示唆された。具体的には、乳児が泣き・ぐずりなど、明らかにネガティブな情動状態に陥った際に、父親・母親から身体接触、共感・代弁・模倣、要求対応・代替提示といった直接的なポジティブ・ニュートラルな対応を多く受けた乳児は、幼児期にアタッチメント安定性が高くなる可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来のアタッチメント研究では親の敏感性や情緒的利用可能性等が子どものアタッチメントに関与することが示されてきた。本研究では、家庭での実際の子育て場面（離乳食場面）をミクロな視点から分析したことで、より具体的に、父親・母親のどのような行動が子どものアタッチメント安定性に関与する可能性があるかを示すことができたと考えられる。つまり、子どもの育ちを両親がどのように保障するかという具体的観点が提示された点に社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：　The main purpose of this study was to identify factors influencing individual differences in attachment security in toddlerhood by analyzing father-mother behavioral characteristics during infancy from a microscopic perspective. The results suggest that parental responses to infants' negative emotional displays, especially intense negative emotional displays, may play a role in later attachment security to fathers and mothers. Specifically, infants who received more direct positive and neutral responses from their fathers and mothers, such as physical contact, empathy, proxy talk, imitation, responding to requests, and offering alternatives, when their infants were in a clearly negative emotional state, such as crying or grogginess, showed higher attachment security in toddlerhood.

研究分野：発達心理学

キーワード：アタッチメント安定性　乳児　情動表出　父親　母親　幼児

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省(2004)は、『「食を通じた子どもの健全育成（－いわゆる「食育」の視点から）のあり方に関する検討会」報告書』を作成した。そこには、特に離乳期の子どもは安心と安らぎの中で、おいしく食べた満足感を（他者に）共感されることが重要とある。しかし、離乳期の乳児は好奇心旺盛であるため食事以外の要求が生起し、食事への集中力が継続しにくいことと、適切な量や様々な食材を食べさせたいという親の要求とが衝突し、親子ともにストレスフルになりやすい(福田, 2008)。こうした葛藤をもたらす場面では、その親が本来持つ行動特性、例えば「敏感性(sensitivity)」（乳児のシグナルに対する親の(a)迅速な気づき、(b)正確な解釈、(c)適切な応答、(d)迅速な応答という 4 側面からなるスキル (Ainsworth et al., 1974)）が反映されやすい(福田,2016)。敏感性は子どものアタッチメント（子どもの恐れや不安などの感情を養育者等によって調整されることを繰り返し、その養育者等に対して成立するシステムで、生涯的にはこの質を基盤として形成された内的ワーキングモデル(IWM）が、出来事の知覚、未来の予測、自分の行動決定に関与する(Bowlby, 1982/1997；1973/1977)など、非常に重要な精神発達指標である）の質を左右する重要な要因といわれる。しかし、単に親の敏感性が高いだけでなく、最近では、乳児のシグナルを読み誤った場合、そのことに親自身が迅速に気付き、乳児のシグナルに見合った対応へと自身の行動を修復できることも重要なのではないかと言われている。また、子どもがシグナルを発していない場面では、親はそれを侵害せず、子どもが何かを求めてきた時に情緒的に利用可能な状態であること（情緒的利用可能性の高さ）や、親子の情動のオープンなやり取りができることも重要だと言われる(遠藤, 2009)。では、実際の子育て場面において、具体的にどのような親の行動が子どものアタッチメント安定性に関与するのだろうか。こうしたことを明らかにするには、親子のやり取りをミクロな視点から分析した知見を積み重ねる必要がある。

また、親の養育行動には、アタッチメントの心的表象(van Ijzendoorn, 1995)、我が子への関与度(小山ら, 2014)、親のストレス(Ritchie & Holden, 1998)、夫婦関係 (福田, 2004)など、様々な要因の関与が報告されている。しかし、その機序については未だに不明瞭で雑然としている。これらを明瞭化することは、社会的介入の糸口になり、子どもの発達を長期的に保障するという観点から重要である。

ところで、こうした親の行動に焦点化した研究は母親に限定されることが多かった。特に日本では、子育ての大半は母親が担っていること(総務省統計局, 2016)が一因であるが、近年では、共働き家庭の増加に伴い父親の育児参加が求められ、海外の研究では、父親との相互作用が父親への子どものアタッチメントの質を決定づける(Lamb, 2010)とする報告も見られる。このことから、母親、父親双方に焦点化し、その行動をミクロな視点から分析することは、子どもの育ちを両親がどのように保障するかという観点から重要と考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、乳幼児のアタッチメント安定性の形成およびその個人差に影響を及ぼす父親・母親の行動特性をミクロな視点から明らかにすること、また、それらの行動特性が心理社会的な要因によって変動する機序を明らかにすることを目的としている。具体的には以下の 2 点が検証の中心となる。

(1) 乳児の行動に対する父親・母親の行動を、特にネガティブな状況に陥りやすい離乳食場面において録画し、ミクロな視点から分析し、2 歳時点での子どものアタッチメントとの関連を検証する。

(2) 父母のストレス、アタッチメント・スタイル、夫婦関係の調和度、子どもとの接触経験など、心理社会的な要因が上記 1 の機序に影響を与えているかを検証する。

3. 研究の方法

父親・母親・子ども(調査１では離乳期、調査 2 では 2 歳前後)の家族を対象に、以下の調査を行った。

調査１　家庭訪問にて、父親と母親がそれぞれ乳児に離乳食を与えている場面を撮影し、両親及び乳児の行動特性をミクロな視点から分析した（行動コーディングシステム(BECO2)を用いて、対象行動の頻度のカウントや時間の計測、34/1000 秒コマ送りや 1/8 倍速再生機能を用いて各人の一連の行動記述を行った)。また、父親と母親に質問紙にて、IWM、夫婦関係、ストレス、子どもの気質、子どもの行動認知、子どもへの関与度(世話時間・世話内容等)等について尋ねた。

調査２　上記の調査からおよそ１年後、家庭訪問にて、アタッチメント Q セット法（Attachment Q-set：以下 AQS）を用い、それぞれの親に対する対象児のアタッチメント安定性を測定した。また、父親と母親に質問紙にて、IWM、子どもの行動認知、夫婦関係、ストレス、子どもへの関与度(世話時間・世話内容など)等について尋ねた。

4. 研究成果

(1)離乳食を与えることの困難さの実態

子どもに「離乳食を与えること」は、育児の悩みとして上位に挙がる。本研究では、こうした

実態を明らかにするため、父子 10 組、母子 10 組、計 20 組を対象に、親による食事供給行動(親が乳児の口元に食事を近づけて食べさせようとする行動)時に、乳児が摂食以外の行動を取って摂食に至らなかった行動を「摂食外行動」と命名し、その表出率を算出した。結果として、摂食外行動は 13 カテゴリーが抽出され(Fig.1 参照)、食事 1 回あたりの摂食外行動の平均出現頻度は、父親に対して 19.3 回(SD=21.52、3～77 回)、母親に対して 18.9 回(SD=19.40、26～80 回)であった(食事時間と摂食外行動数との相関は見られなかった(r=.071, n.s.))。この摂食外行動は、父親の食事供給行動に対して平均 32.12%(SD=24.36、12.50～94.20%)、母親に対して 34.93%(SD=19.23、12.33～65.38%)を占めた。このことから、個人差は大きいものの、平均すると親の食事提供行動の 3 分 1 以上は乳児の摂食行動に至らないことが明らかになり、離乳食を与えることの困難さが浮き彫りとなった(福田・森下・尾形, 2020a)。

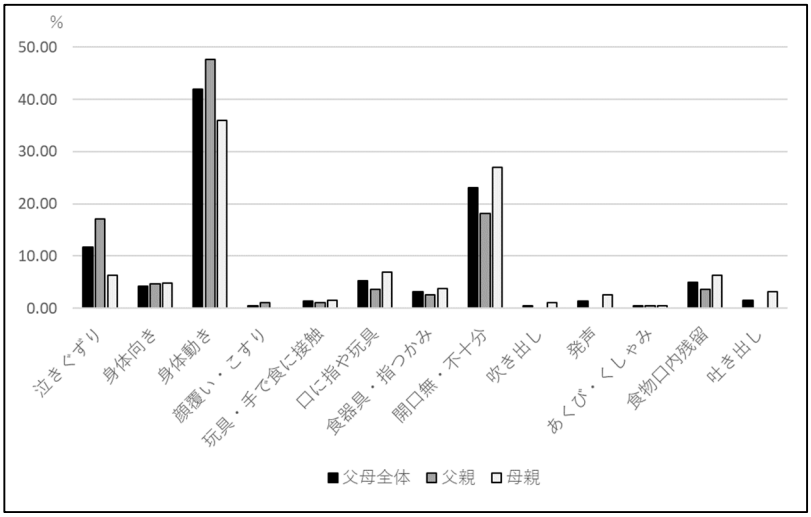

Fig.1 各摂食外行動カテゴリーが全摂食外行動に占める割合

(2) 幼児のアタッチメント安定性に関与する要因

1)要因の抽出

上記の摂食外行動を同程度表出した乳児の親(父親 3 名、母親 3 名)を分析した福田ら(2021a)において、乳児の摂食外行動に対する親の対応には個人差があることが確認されている。また、福田ら(2019a)や福田ら(2019b)、福田ら(2019c)、福田ら(2022a)では、乳児の口に入れる際の行動やアイコンタクトの頻度、情動表出等、離乳食場面における様々な親の行動には個人差が見られることが明らかになっている。では、具体的にどのような行動が子どものアタッチメント安定性に関与するか、数ある要因の中から焦点化すべき要因に見当をつけることを目的として、2 歳前後でのアタッチメント安定性に大きな差のあった 2 名(A 児 B 児)をピックアップし、1)①、②－2、2)以降の研究では食事場面の序盤、中盤、終盤の各 1 分計 3 分間、②－1 では食事開始から 5 分間、親子のやり取りを観察記録し、そこに見られる乳児あるいは親の特徴、親子のやり取りの特徴の相違点を抽出した。結果は以下の通りである。

①乳児の情動表出の明瞭さ

A 児と B 児間では、ポジティブ・ネガティブの情動表出率の相違が見られた(A 児、B 児の順に、ポジティブ;39.9%、16.2%、ネガティブ;24.9%、10.4%)。また、A 母と B 母間では、乳児の情動表出への対応バリエーションの豊富さの相違が見られた(A 母、B 母の順に、13 種中 12 種、4 種)。さらに、A 母子と B 母子間では、ポジティブな情動表出率の母と子の差に相違が見られた(A 母子、B 母子の順に、母 52.9%、子 39.9%、差 13.0%、母 61.3%、子 16.2%、差 45.1%)。これらのことから、「乳児の情動表出の明瞭さ」が親の行動に相違をもたらすのではないかと推察される。親の情動表出率に関しては、A 母 B 母間に大きな相違は見られなかった(福田・尾形・森下, 2022b)。なお、福田ら(2023a)においても、乳児の明瞭な情動表出と親のポジティブな情動表出の均衡が取れているケースにおいて、子どものアタッチメント安定性が高い可能性が示されている。

②－1 随伴性の高さ(親子のやりとり)

A 母子と B 母子間で、アイコンタクトの頻度、母親の発話の頻度、母親が発話した時に子どもの方を向いているか否かに大きな違いが見られた。A 母子のアイコンタクト頻度の多さ(16 回)、A 母の発話頻度の多さ(61 回)、A 母が子への話しかけ時に子を見る頻度の多さ(58 回)は、いずれも、A 児が母の行動に対して反応が明確であることに由来した。一方、B 親子のアイコンタクト頻度の少なさ(5 回)、B 母の発話頻度の少なさ(29 回)、B 母が子への話しかけ時に子を見る頻度の少なさ(17 回)は、いずれも、B 児があまり母を見ず、反応が明確でないことに由来した。これらのことから、「子どもの随伴性の高さ」が親の行動に相違をもたらすのではないかと推察される(福田・森下・尾形, 2021b)

②－2 随伴性の高さ(乳児のネガティブ情動に対する親の対応直後の乳児の随伴性)

上記の「乳児の情動表出の明瞭さ」と「随伴性の高さ」の特徴に差が見られたことを受け、乳児のネガティブ情動に対する親の対応直後の乳児の随伴性について検討した。A 児のネガティブ情動表出 45 回中 A 母が対応した回数は 32 回(71.1%)、B 児のネガティブ情動表出 18 回中、B 母が対応した回数は 15 回(83.3%)であり、親の対応として、身体接触、アイコンタクト、情動模倣、見守り、意識転換、ポジティブトーンの発話、ポジティブトーンの応答、ニュートラルトーンの発話、ポジティブ表情、要求対応、大げさリアクション、代替案・物の提示が抽出され

た。親の対応後、A 児のポジティブ反応(P 随伴)は 75%、ネガティブ反応（N 随伴）は 3.1%、情動変化なし・親の対応に無関係な行動(非随伴)は 21.9%であった。B 児はそれぞれ 33.3%、6.7%、60.0%であった。A 児は P 随伴が多く、B 児は非随伴が多く見られた。A 児はネガティブな情動表出が多く明瞭であるため、親が積極的に対応したことにより、子どもの P 随伴が多く見られたと考えられる。一方 B 児は、もともとネガティブな情動表出が弱く、親の対応が見守りという比較的消極的な対応が頻出することから、子どもは親の対応に気付かずに非随伴が増えたと考えられる。このように、「子どもの情動表出の明瞭さが親の対応に影響し、その親の対応が子どもの随伴性の高さに影響する」ことが推察される(福田・森下・尾形，2022c)。

2)上記要因とアタッチメント安定性との関連

上記のとおり、2 組の母子の分析から、乳児の情動表出の明瞭さが親の対応に影響し、その対応が乳児の随伴性の高さに影響し、それがさらに親の対応に影響を及ぼすといった循環が推測された。そこで、分析対象を親子 4 組 8 ケースに増やし、親の行動に対する乳児の随伴性と 2 歳前後の時点でのアタッチメント安定性との関連について検討した。乳児の随伴性行動としては、親が近づけた対象物を見る、親の視線の先を見る、親が視線を向けると親の顔を見る、親の発声に対し親を見るなどが挙げられた。ケース数は少ないが参考までにこれらの随伴性行動率と幼児期のアタッチメント安定性（AQS 得点）の関連についてピアソンの相関係数を算出したところ、有意ではないが比較的高い相関が示された(r=.559，p<.150)。このことから、乳児の随伴性が高いほど、幼児期のアタッチメント安定性が高まる可能性が示唆された。乳児の随伴性の高さは、親の行動へのフィードバックの機会を高め、親の次の行動指針となることで、乳児に対してより適した行動を取りやすくし、ひいては子どものアタッチメント安定性を高めたのではないかと推察される。(福田・森下・尾形，2023b)

同じく上記のとおり、2 組の母子の分析から、乳児の情動表出に対する親の対応バリエーションの豊富さに相違が見られたことから、乳児のネガティブ情動に的を絞り、それに対する父母の行動カテゴリー(Table1)の種類の多さと幼児期のアタッチメント安定性との関連について検討した。分析対象は親子 6 組 12 ケースのうち、基準として設けた 5 秒間以上継続するネガティブ情動場面が抽出できなかった 1 ケースを除外した 11 ケースである。親が示した行動カテゴリー数と幼児期のアタッチメント安定性についてピアソンの相関係数を算出したところ、有意な相関は示されなかった(r=.488，n.s.)。しかし、これらの親の行動カテゴリーには、視線のみ向ける行動や親の一人言、他者への話しかけ(⑨⑩⑪)といった乳児に直接関与していない行動が含まれていたため、乳児に直接的にポジティブあるいはニュートラルに対応した行動カテゴリー(①～⑧)に絞り、それらの種類数と幼児期のアタッチメント安定性との相関分析を行ったところ、正の有意傾向の相関が示された(r=.587，p<.10)。このことから、乳児のネガティブな情動表出に対し、直接的にポジティブあるいはニュートラルに親が乳児に対応した、その行動バリエーションが多いことが、子どものアタッチメント安定性にプラスの影響をもたらす可能性が示唆された（福田・森下・尾形，2024a）。福田ら(2023c)でも同様の結果が示されている。

上記の結果から、乳児のネガティブな情動表出に対する親の直接的対応が、後のアタッチメント安定性に関与する可能性が示唆されたが、離乳食場面において、乳児に食事を与えながら、乳児がネガティブ情動を表出するたびに親が直接的な対応を取ることは困難である。そこで、乳児のネガティブ情動の強度を 3 段階（強・中・弱）に分け、強および弱のネガティブ情動表出に対して親が取る直接的なポジティブ・ニュートラル対応（対応行動）の表出率と幼児期のアタッチメント安定性との関連について検討した（中程度のネガティブ情動を表出した乳児が少なかったため、分析から除外した）。分析対象は上記の 11 ケースである。乳児の強いネガティブ情動に

Table1　乳児のネガティブな情動表出直後の親の行動カテゴリー

	カテゴリー	内容
①	身体接触	偶発的ではなく、親が意図的に頭をなでたり、手を掴んだりする。また、体勢が崩れてしまった場合に、身体を引き上げる等。
②	共感/代弁/模倣	「もう嫌になっちゃったね」等と共感したり、その気持ちを代弁したり、その気持ちを表すような表情をして見せる等。
③	アイコンタクト	対象児が親を見ている時に、親も対象児に視線を合わせる。
④	要求対応/代替提示	対象児が触りたい等の要求を示した物を渡したり、代わりの物を渡したりする等。
⑤	褒め	「今日はよく食べてるね」等と褒める。
⑥	質問	「どうした？」「眠くなっちゃった？」等と尋ねる。
⑦	説得/誘導/気分転換	「もう少し食べよう」等と説得したり誘導したり、食器の中を見せて「ほら、あとちょっとだよ」等と言う。
⑧	返事･発話のみの応答	対象児の発声や泣き等に対して「はいはい」「わかったよ」等と返事だけする等。
⑨	一人言/ 自己完結反応	「もう要らないかな」「終わりですね」と明らかに自問自答のように言う等。
⑩	視線のみ	対象児に視線を向けるのみ。※アイコンタクトはない。
⑪	他者への話しかけ	対象児に見えないように隠れていたもう一人の親や観察者に向けて「終わりかな」等と声をかける。
⑫	対応なし	対象児以外のところに視線を向け、食事を冷ましたり、食べ物をかき集めたりする作業等をし、対象児に直接かかわらない。
⑬	ネガティブ反応	いくぶんいらだった口調で発話する等。
⑭	不明	テーブルの下に落ちたものを拾ったり、物を取るために後ろを向いたりして、表情が見えず、なおかつ、発話もない。

対する親の対応行動の表出率と幼児期のアタッチメント安定性との相関分析を行ったところ、有意な正の相関が見られた(r=.679, p<.05)。一方、弱いネガティブ情動に対する親の対応行動の表出率とアタッチメント安定性との間には有意な相関は見られなかった(r=-.045, n.s.)。このことから、離乳食場面において、乳児の強いネガティブ情動表出に対して、親が直接的なポジティブ・ニュートラル対応を取ることが、幼児期のアタッチメント安定性に関与する可能性が推察される(福田・森下・尾形, 2024b) 。

従来のアタッチメント研究では親の敏感性等が子どものアタッチメントに関与することが示されてきたが、それらには子どもの情動表出の明瞭さが関連している可能性があること、また、子どもの随伴性が親へのフィードバックとしてさらなる養育行動を引き出すこと、さらに、乳児のネガティブな情動表出に対して、親は短い時間のなかで様々な試行錯誤を経ていることが示唆されたことは、本研究でミクロな分析に取り組んだ成果であると考えられる。これらの全体的な成果は、大久保・梅村・福田他(2023)でも報告している。

なお、当該研究は、乳児期から幼児期までの縦断研究であったことから、新型コロナウイルス感染症の流行による調査中断により、初回調査の対象児の多くが継続調査の対象外の年齢となってしまった。研究延長はしたものの、乳児期の調査からやり直す必要があり、思うようにサンプル数を集めることができなかった。そのため、研究目的の(2)のアンケート調査データを用いた分析は、父親の育児関与状況と父親の行動との関連(福田ら, 2020b)など、一部の成果報告を除いて、ほとんど実施できなかった。これに関しては、当該研究期間後に継続調査を行うことでサンプル数を増やし、今年度以降、取り組む予定である。

＜引用文献＞

Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. F. 1974 Infant-mother attachment and social development: ‘Socialization’ as a product of reciprocal responsiveness to signals. In M. P. M. Richards (Ed.). *The integration of a child into a social world* (pp.99-135). Cambridge: Cambridge University Press.

Bowlby,J. 1973 Attachment and loss: Vol.2 Separation. New York: Basic Books. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) 1977 母子関係の理論:Ⅱ分離不安 岩崎学術出版社

Bowlby,J. 1982 Attachment and loss: Vol.1 Attachment. New York: Basic Books. 黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子・黒田聖一(訳) 1997 母子関係の理論:Ⅰ愛着行動(三訂版) 岩崎学術出版社

遠藤利彦 2009 情動は人間関係の発達にどうかかわるのか―オーガナイザーとしての情動、そして情動的知性 須田治(編) 『情動的な人間関係への対応』 金子書房

福田佳織 2004 母親の乳児に対する敏感性と夫婦関係,ソーシャルサポート,乳児の気質との関連 学校教育学研究論集(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科編), 9, 1-12

福田佳織 2016 母親の敏感性測定における場面設定の検討－食事場面・遊び場面における母親の敏感性と 1 年後の子どものアタッチメント安定性の関連から－ 日本発達心理学会第 27 回大会, 565

厚生労働省 2004 楽しく食べる子どもに ～食からはじまる健やかガイド～ 「食を通じた子どもの健全育成(－いわゆる「食育」の視点から－)のあり方に関する検討会」 報告書 https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/02/dl/s0219-4a.pdf（アクセス日：2024 年 6 月 9 日）

小山里織・森山雅子・小林佐知子・長谷川有香・丸山笑里佳 2014 父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の関連: 妊娠期から生後 4 か月までの縦断的研究 小児保健研究, 73(5), 680-688

Lamb, M. E. 2010 How do fathers influence children's development? Let me count the ways. In M. E. Lamb (Ed.), *The role of the father in child development* (5th ed., pp. 1-26). John Wiley & Sons.

総務省統計局 2016 「平成 28 年社会生活基本調査」 https://www.stat.go.jp/info/guide/public/houdou/pdf/160930.pdf（アクセス日：2016 年 9 月 30 日）

Ritchie,K. L. & Holden, G. W. 1998 Parenting Stress in Low Income Battered and Community Women: Effects on Parenting Behavior. *Early Education and Development*, **9**, 97-112.

van IJzendoorn, M. H. 1995 Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A metanalysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, **117**,387-403.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男	４．巻 32
２．論文標題 乳児のネガティブ情動表出に対する父親および母親の行動が幼児期のアタッチメント安定性に与える影響	５．発行年 2024年
３．雑誌名 東洋学園大学紀要	６．最初と最後の頁 123-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24547/0002000048	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男	４．巻 31
２．論文標題 離乳食場面に見られる父子・母子の情動表出の特徴と幼児期の父親・母親に対する子どものアタッチメント安定性との関連	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東洋学園大学紀要	６．最初と最後の頁 124-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24547/00000863	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田 佳織、尾形 和男、森下 葉子	４．巻 30
２．論文標題 離乳食場面に見られる親子の相互作用の特徴とアタッチメント安定性との関連性 ： アタッチメント安定性の高低の子どもとその親のケースの比較	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東洋学園大学紀要 = Bulletin of Toyo Gakuen University	６．最初と最後の頁 64 - 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24547/00000803	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男	４．巻 29
２．論文標題 乳児の摂食外行動に対する親の対応の個人差―離乳食場面の観察データから―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋学園大学紀要	６．最初と最後の頁 26-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24547/00000755	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男	4．巻 28
2．論文標題 父親・母親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現状況 ： 離乳食場面の観察から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋学園大学紀要	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24547/00000714	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田佳織・森下葉子・尾形和夫	4．巻 27
2．論文標題 離乳食場面における親の「あーん」行動パターンとその表出時間	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東洋学園大学紀要	6．最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
2．発表標題 乳児のネガティブ情動に対する親の対応種数と幼児期のアタッチメント安定性との関連
3．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4．発表年 2024年

1．発表者名 大久保圭介・梅村比丘・福田佳織・北川恵・坂上裕子
2．発表標題 乳幼児を対象とした最近の日本のアタッチメント研究から考える意義と課題
3．学会等名 日本心理学会第87回大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
２．発表標題 乳児のネガティブ情動表出直後の父親・母親行動と幼児のアタッチメント安定性との関連 －離乳食場面における親子のやり取りの観察を通して－
３．学会等名 日本応用心理学会第89回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
２．発表標題 親の行動に対する乳児の随伴性と幼児のアタッチメントの関連 ‐離乳食場面における親子のやり取りの観察と幼児期のアタッチメント安定性の測定を通して‐
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 福田佳織・尾形和男・森下葉子
２．発表標題 離乳食場面における父子および母子の情動表出と子どものアタッチメント安定性との関連
３．学会等名 日本応用心理学会第88回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
２．発表標題 離乳食場面における乳児の社会的随伴性の特徴 －アタッチメント安定性の高い子どもと低い子どもの比較－
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
２．発表標題 AQS得点に差のある2人の幼児に見られた乳児期の母子のやり取りの相違 ―離乳食場面の観察から―
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
２．発表標題 父親の摂食成功率と父親の育児関与状況との関連
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和男
２．発表標題 父親の育児関与と乳児とのアイコンタクト量との関連 ―離乳食場面を通して―
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 福田佳織・森下葉子・尾形和夫
２．発表標題 離乳食場面における親子の位置取りとアイコンタクト率との関連
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	尾形　和男 (Ogata Kazuo) (10169170)	埼玉学園大学・人間学部・教授 (32421)	削除：2023年4月17日
研究分担者	森下　葉子 (Morishita Yoko) (90591842)	学校法人文京学院　文京学院大学・人間学部・准教授 (32413)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関